

ふるさとの 其の42 誇り

竹蛇籠

見直される伝統的治水技術



細部を確認して完成。この後籠の中に石を投げ入れます。

生活を支えてきた竹蛇籠

竹蛇籠じゅうなだとは、割竹で円筒形に編んだ籠の中に石を詰め込んだもので、古くから河川の護岸や取水のための堰せきに利用されてきました。明治時代に入り鉄線で編んだ蛇籠が現れ、戦後に鉄線蛇籠が急速に広まると、昭和30年代後半以降、竹蛇籠は耐久性の問題からほとんど使われなくなりました。

しかし現在でも、その技を伝える方が市内にいらっしやいます。治水に最も腐心した地域のひとつである上高砂にお住まいの齊藤さん、清水さん、森本さんです。

森本さんによれば、蛇籠作りは昭和20年代から30年代の初めまで、上高砂の仲間と農閑期の1〜2月に行っていたそうです。地元の上高砂の四ヶ村堰取水口に並べた牛（護岸施設用として作った）こともあれば、富士川河口付近の河川改修工事の際に仮設堤防の護岸用に作ったこともあったそうです。

です。山梨県に大きな被害をもたらした昭和34年の台風7号の時には、韮崎市へ協力し、暴風雨の中、船山橋付近で多くの蛇籠を作って堤防の決壊を防いだこともあったとか。

かつてさかんに作られた竹蛇籠も、現在ではほとんど見ることができなくなりました。しかし、竹蛇籠は自然の素材を活かして作られているため、石の隙間がヒオトープ（生物が生きる場所）となって生き物を育み、最終的には自然に帰ることができるといふ環境にやさしい利点をもつます。運びやすく、短時間で作ることができるのも魅力です。この伝統的な技術は、環境や生物の多様性が課題となっている現在、再び注目されているのです。

3人の方たちが作った蛇籠は、ふるさと文化伝承館に展示されています。私たちの生活を支えてきた竹蛇籠とその見事な伝統の技をぜひともご覧ください。



竹を4つに割る。「シュコーン」という音とともに一瞬で出来上がり。



竹の中身を剥ぎ取った後、六角形に竹を編んでいく。



広がらないように引締めながら、同じ太さになるように調節。



六角形になるように編みこんでいく。



齊藤さん、森本さん、清水さん(左から)

『堤の原風景 Ver.2』と『遺跡で散歩Vol.4 戦国時代の史跡を歩く改訂版』が発行されました！

市内の治水・利水をテーマにした『堤の原風景Ver.2』が刊行されました。新たに徳島堰や将棋頭の最新発掘情報、浅原村の変遷などを大幅に追加し、図や古写真を交えてわかりやすく解説しています。

『遺跡で散歩Vol.4』改訂版では、甲西地区南部に広がる武田家に仕えた武将の館跡伝承地などを追加しました。マップを片手にウォーキングを楽しんでみてはいかがでしょうか。

パンフレットとマップは市役所、市教育委員会、各図書館、美術館、道の駅などで無料配布しています。

